References

1 Ueda K, Kawano H, Hasuo Y, Fujishima M: Prevalence and etiology of dementia in a Japanese community. Stroke 1992;23:798–803.

2 Hatada K, Okazaki Y, Yoshitake K, Takada K, Nakane Y: Further evidence of westernization of dementia prevalence in Nagasaki, Japan, and family recognition. Int Psychogeriatr 1999;11:123–138.

3 Urakami K, Adachi Y, Wakutani Y, Isoe K, Ji Y, Takahashi K, Nakashima K: Epidemiologic and genetic studies of dementia of the Alzheimer type in Japan. Dement Geriatr Cogn Disord 1998;9:294–298.

4 Shiba M, Shimogaito J, Kose A, Fujiuchi S, Nishiyama H, Yoshimasu F, Asai T, Rocca WA: Prevalence of dementia in the rural village of Hanazono-mura, Japan. Neuroepidemiology 1999;18:32–36.

5 Wakutani Y, Kusumi M, Wada K, Kawasima M, Ishizaki K, Mori M, Mori N, Ijiri T, Adachi Y, Ashida Y Kuno N, Urakami K, Takeshima T, Nakashima K: Longitudinal changes in the prevalence of dementia in a Japanese rural area. Psychogeriatrics 2007;7:150–154.

6 Folstein MF, Folstein SE, McHugh PR: 'Mini-mental state'. A practical method for grading the cognitive state of patients for the clinician. J Psychiatr Res 1975;12:189–198.

7 Blessed G, Tomlinson BE, Roth M: The association between quantitative measures of dementia and of senile change in the cerebral gray matter of elderly subjects. Br J Psychiatry 1968;114:797–811.

8 Granger CV, Rewis LS, Peters NC, Sherwood CC, Barrett JE: Stroke rehabilitation – analysis of repeated Barthel index measures. Arch Phys Med Rehabil 1979;60:14–17.

9 American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, ed 4. Washington, American Psychiatric Association, 1994.

10 McKhann G, Drachman D, Folstein M, Katzman R, Price D, Stadlan EM: Clinical diagnosis of Alzheimer's disease: report of the NINCDS-ADRDA Work Group under the auspices of Department of Health and Human Services Task Force on Alzheimer's Disease. Neurology 1984;34:939–944.

11 Roman GC, Tatemichi TK, Erkinjuntti T, Cummings JL, Masdeu JC, Garcia JH, Amaducci L, Brun A, Hofman A, Moody DM, O'Brien MD, Yamaguchi T, Grafman J, Drayer BP, Bennett DA, Fisher M, Ogata J, Kokmen E, Bermejo F, Wolf PA, Gorelick PB, Bick KL, Pajeau AK, Bell MA, DeCarli C, Culebras A, Korczyn AD, Bogousslavsky J, Hartmann A, Scheinberg P: Vascular dementia: diagnostic criteria for research studies: report of the NINDS-AIREN International Workshop. Neurology 1993;43:250–260.

12 McKeith IG, Dickson DW, Lowe J, Emre M, O'Brien JT, Feldman H, Cummings J, Duda JE, Lippa C, Perry EK, Aarsland D, Arai H, Ballard CG, Boeve B, Burn DJ, Costa D, Del Ser T, Dubois B, Galasko D, Gauthier S, Goetz CG, Gomez-Tortosa E, Halliday G, Hansen LA, Hardy J, Iwatsubo T, Kalaria RN, Kaufer D, Kenny RA, Korczyn A, Kosaka K, Lee VM, Lees A, Litvan I, Londos E, Lopez OL, Minoshima S, Mizuno Y, Molina JA, Mukaetova-Ladinska EB, Pasquier F, Perry RH, Schulz JB, Trojanowski JQ, Yamada M, Consortium on DLB: Diagnosis and management of dementia with Lewy bodies: third report of the DLB Consortium. Neurology 2005;65:1863–1872.

13 Emre M, Aarsland D, Brown R, Burn DJ, Duyckaerts C, Mizuno Y, Broe GA, Cummings J, Dickson DW, Gauthier S, Goldman J, Goetz C, Korczyn A, Lees A, Levy R, Litvan I, McKeith I, Olanow W, Poewe W, Quinn N, Sampaio C, Tolosa E, Dubois B: Clinical diagnostic criteria for dementia associated with Parkinson's disease. Mov Disord 2007; 22:1689–1707.

14 Litvan I, Agid Y, Calne D, Campbell G, Dubois B, Duvoisin RC, Goetz CG, Golbe LI, Grafman J, Growdon JH, Hallett M, Jankovic J, Quinn NP, Tolosa E, Zee DS: Clinical research criteria for the diagnosis of progressive supranuclear palsy (Steele-Richardson-Olszewski syndrome): report of the NINDS-SPSP international workshop. Neurology 1996;47:1–9.

15 Neary D, Snowden JS, Gustafson L, Passant U, Stuss D, Black S, Freedman M, Kertesz A, Robert PH, Albert M, Boone K, Miller BL, Cummings J, Benson DF: Frontotemporal lobar degeneration: a consensus on clinical diagnostic criteria. Neurology 1998;51: 1546–1554.

16 Reisberg B: Dementia: a systematic approach to identifying reversible causes. Geriatrics 1986;41:30–46.

17 Yamada T, Hattori H, Miura A, Tanabe M, Yamori Y: Prevalence of Alzheimer's disease, vascular dementia and dementia with Lewy bodies in a Japanese population. Psychiatry Clin Neurosci 2001;55:21–25.

18 Ikeda M, Hokoishi K, Maki N, Nebu A, Tachibana N, Komori K, Shigenobu K, Fukuhara R, Tanabe H: Increased prevalence of vascular dementia in Japan: a community-based epidemiological study. Neurology 2001;57:839–844.

19 Meguro K, Ishii H, Yamaguchi S, Ishizaki J, Shimada M, Sato M, Hashimoto R, Shimada Y, Meguro M, Yamadori A, Sekita Y: Prevalence of dementia and dementing diseases in Japan: the Tajiri project. Arch Neurol 2002; 59:1109–1114.

20 Zaccai J, McCracken C, Brayne C: A systematic review of prevalence and incidence studies of dementia with Lewy bodies. Age Ageing 2005;34:561–566.

21 Yokota O, Sasaki K, Fujisawa Y, Takahashi J, Terada S, Ishihara T, Nakashima H, Kugo A, Ata T, Ishizu H, Kuroda S: Frequency of early and late-onset dementias in a Japanese memory disorders clinic. Eur J Neurol 2005; 12:782–790.

22 McKeith IG, Burn D: Spectrum of Parkinson's disease, Parkinson's dementia, and Lewy body dementia; in DeKosky ST (ed): Neurologic Clinics. Philadelphia, Saunders, 2000, pp 865–883.

23 Hughes AJ, Daniel SE, Blankson S, Lees AJ: A clinicopathologic study of 100 cases of Parkinson's disease. Arch Neurol 1993;50: 140–148.

24 Aarsland D, Zaccai J, Brayne C: A systematic review of prevalence studies of dementia in Parkinson's disease. Mov Disord 2005;20: 1255–1263.

25 Vraamark Elberling T, Stokholm J, Høgh P, Waldemar G: Diagnostic profile of young and middle-aged memory clinic patients. Neurology 2002;59:1259–1262.

26 Ratnavalli E, Brayne C, Dawson K, Hodges JR: The prevalence of frontotemporal dementia. Neurology 2002;58:1615–1621.

報告 研究

認知症予防のための安心院プロジェクト

9年間の歩み

吉田香織　宇佐市安心院支所市民サービス課
大久保みゆき　福岡大学医学部神経内科学
山田達夫　福岡大学医学部神経内科学

はじめに

Alzheimer's disease（AD）の前駆状態とされるMild Cognitive Impairment（MCI）に対して認知症への転換率をみた介入研究は少ない。近年、わが国でも長期にわたる認知症予防研究が各地で進行中である。3年間で389名の住民に予防活動を展開した矢冨の先駆的研究[1]では、知的活動と運動の複合的プログラムを小グループで行うことが、認知症発症に先立つ認知機能低下を遅らせる効果を示すと述べられている。この研究では、Ageing-Associated Cognitive Decline（AACD）の住民（現在のMCIの定義に一致）をも対象とし、記憶や注意力の改善を認めている。

デヴィッド・スノウドン（David Snowdon, Ph. D.）による『100歳の美しい脳―アルツハイマー病解明に手をさしのべた修道女たち』という本には、「ナン・スタディ」の詳細が書かれている。ノートルダム教育修道女会のシスターを対象とした加齢とADの研究の歩みについてである。そこには65歳以上の各年齢での死亡リスクが米国の一般女性よりシスターでは約25％も低いことが示されている。

100歳を超えても頭が冴えわたっているシスターがいることに、①深い精神性（前向きな人生観に加えて、強い信仰心があること）と②友情と愛情の常設ネットワーク（コミュニティー）を形成していること――が、死亡年齢を押し上げ、AD発症を遅らせているのではないかと推察されている。

死の直前まで知的には健常と判定されたシスターメアリーは101歳で生涯を閉じた。彼女の脳は870グラムと萎縮し、海馬領域には神経原線維変化がかなり多く、ADとして問題ない変化であったが、新皮質の神経原線維変化がわずかであった（Braak分類でⅢ―Ⅳと推定される：初期AD か）。

なぜ、シスターメアリーは記憶力も含め、ほぼ正常であったのか？　このようなシスターに関する研究からAD予防を考える意味は大である。

この論文では我々が9年前から認知症予防として実施している大分県安心院プロジェクトの活動経過を紹介する。

安心院プロジェクトの経緯（図1）

2002年、安心院町保健師と地元医師会からの要請を受け、福岡大学の倫理審査を受け、福岡大学神経内科が安心院町で町の行政と協力してMCI有病率調査と認知症予防活動を行うことを了承した。

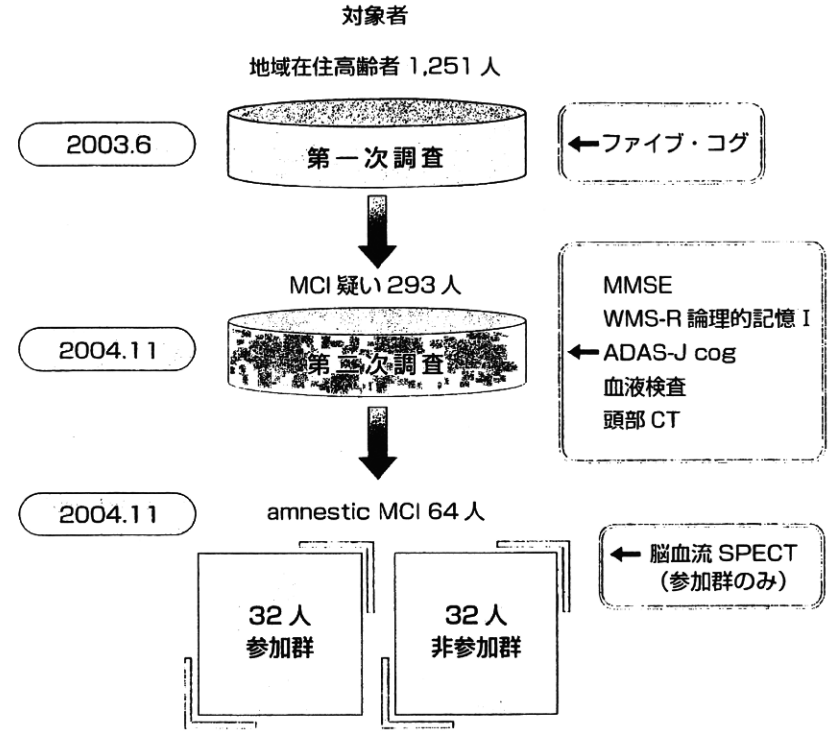
当初、本研究におけるMCIは、1996年のPertersenの定義に基づき、①診察の結果DSM―ⅣおよびNINCDS―ADRDAの診断基準により認知症がないこと②自身で物忘れの訴えがあること③CDR（Clinical Dementia Rating）0・5と判定されること④基本的なADLに障害のないこと⑤ファイブ・コグ（記憶、視空間、言語、注意、抽象的思考の5つの認知機能項目によって構成されている[2]――の成績で記憶は−1SD以下であり、他の4つの認知機能は1SD以内であることとした（従っていわゆるamnestic MCI〈aMCI〉である）。

プロジェクト開始当初は各種団体組織との協議や認知症予防講演会を頻繁に開催し、この地区での調査・予防研究の合意形成を得た。その後2003年6月から04年11月まで、地域に在住している65歳以上高齢者を対象に一次調査が行われた。

毎週1、2回、各地区の公民館を巡回し、家族構成や教育歴、疾病の既往歴や日常生活動作障害（IADL）を聴取し、GDS（Geriatric Depression Scale）によるうつの有無を問診によって評価した。住民の認知機能評価はファイブ・コグによって行った。

検査後には認知症啓発活動を目的と

表1　安心院プロジェクト参加者抽出の流れ



した教育講演を実施し、こうした活動を含め、一次調査を「いきいき元気教室」と名づけた。問診、テストと講演で約2時間の教室であった。

一次調査終了時、1251人の地域住民への調査が完了した（男性439人、女性812人、平均年齢75・0歳、平均教育歴9・9年）。住民登録していた当時の65歳以上の人口は2725人であったが、町以外に生活の場を移していたり、入院・入所していた住民を考慮すると、実質調査対象者は1782人となり、約70％の調査率と考えられた。

一次調査でファイブ・コグの1項目のみ標準より低下している（single domain MCI：sdMCI）と判定された住民は293人（23・4％）で、これら住民に二次調査が行われた。

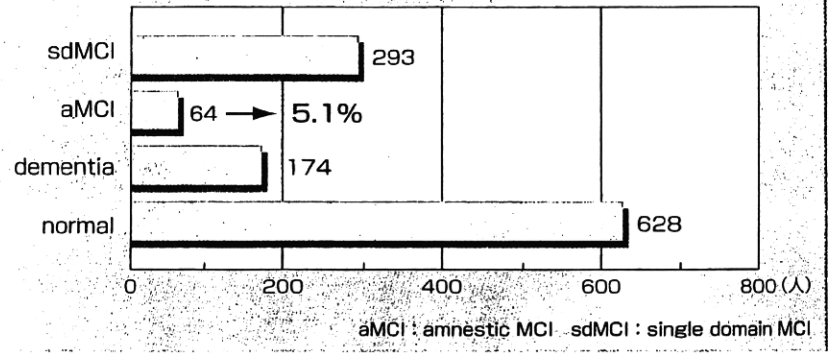
二次調査は認知症診療を専門とする神経内科医と老年科医による詳細な問診と診察、血液検査、頭部CT、脳血流SPECTおよび詳細な心理検査と一般的な血算、生化学のほか、ビタミンB_{12}濃度や甲状腺ホルモン濃度測定を含んだ血液検査であった。その結果、明らかに記憶のみが障害され、aMCIと判定された住民は64人であり、対象者の5・1％であった（表2）。

二次調査で施行した脳血流SPECTでは脳血管性と脳外傷性3人を除く全例で、初期ADで認められる帯状回後部、楔前部と頭頂葉皮質での血流低下が認められた。

この64人の住民に対し、認知症進行予防活動研究への参加を呼びかけた。そのうち本プロジェクトの趣旨に同意した32人を予防活動参加群と対照群に、ランダムに割り当てた。

その結果、18人が予防活動群となり、従来通りの生活を行う14人が対照群となった。両群の年齢、教育年数に有意差は認めなかった。

表2　aMCIの頻度（対象1,251人）2003年6月20日～04年11月5日



安心院プロジェクトで行われた社会的・積極レジャー活動の内容

04年4月、参加住民間の相談により「安心院けんこうクラブ」と命名した組織が設立され、活動が開始された。活動内容も参加者の話し合いにより、計画を立て、結果を点検し、達成感を得ることができるものを実行することとした。

活動開始3カ月の間では、①使用されていなかった古家をリフォームし、活動の拠点（安心院けんこうクラブ）となるように整備する作業②栄養士の指導を受けた、自分たちでメニューを決め、食材の手配から調理までを行う料理教室③スポーツインストラクターの指導の下で踏み台昇降やケア・ビクスなどの運動療法――を行った。

①②は午前中、③は午後に施行した。補佐役として、安心院役場のスタッフ

である保健師や看護師3人が見守り活動に参加した。

一貫してこの活動は、1人のファシリテーターと1人の運動指導員によって見守られた活動であり、最近でのかかわりはかなり減少し、完全に自主的な活動に近づいている。いずれにせよ自主的・創造的な点が特徴で、その原則的活動方法は東京都老人総合研究所の矢冨直美主任研究員の指導に従ったもので、地域で行い、注意力・記憶力の向上を目指した。

現在、主として行われている社会的・積極的レジャー活動の内容は、NHKの「難問解決！　ご近所の底力」でも取り上げられた料理活動、小旅行、有酸素運動（ケアビクスやステップ運動）、運動会、囲碁、ゲーム、パズル、トランプ、ビンゴ、折り紙、連想ゲーム、学習レジャーなどである。

いずれも参加者が企画し、役割分担し、各自が準備して、さまざまな組み合わせで行われている。

朝9時に健康チェックを行い、会費（500円）を徴収。その後活動が開始され、11時からは昼食準備（前の週にメニューは相談して決める）、昼食後は有酸素運動でおおよそ15時には終了。

週に1回であり、構成員は1グループが8～10人を原則としている。またすべてがMCIではなく、現在の3グループ（火、木、金曜グループ）には健常者も数名加わっており、時に介護認定で自立と判定された超早期AD住民も含まれることもあった。

予防活動の評価と認知症への転換の現状

福岡大学の医師と心理士によって、問診、ファイブ・コグと脳血流SPECTを用いた評価が毎年行われた。特に1年後の評価は詳細に行われ、その成果は論文に記載されている[3][4]。

先に述べた予防活動群18人と対照群14人を対象にして、1年後の予防活動の効果を解析した。それによると予防活動群は対照群に比べて、記憶と言語の項目で有意な得点の上昇が認められ、一方、対照群においては記憶と言語では悪化する傾向を認めた。

また、脳血流SPECTにおいては対照群の血流低下部位の拡大が見られたのに対し、予防活動群では血流改善を認めた。対照群14人からは、1年後に2人がADに転換し、予防活動群からの転換はなかった。また、2年後には対照群の14人から3人がADに転換した。

非予防活動群46人の3年目以降については、CDRを利用した保健師の聞き取りによって認知症への転換の有無が調査された。それによると3年目の評価時点では12人（26%）が認知症に転換したと評価された。ADが10人であり、混合型認知症が1人、レビー小体型認知症1人であった。この時点での非予防活動群の正常への復帰者（リバーター）は6人（13%）であった（表3）。

6年目現在、保健師による十分な調査が行われた非予防活動群に属する40人（6人は未調査）中、6人が死亡し、そのうちの5人が生前認知症を呈した。

その他の34人中16人が認知症に転換していた。すなわち6年目で21人（53%）が認知症に転換したことになる。これはこれまでの報告（地域での転換率は年に4～15%）[5]と一致している。

一方、予防活動群18人からは、3年目で16人が正常化し（リバーター、89%）、4年目の時点においても1人も認知症への移行はなかった。しかし、5年目になって1人がADに、他の1人が脳血管性認知症に転換した。

表3　3年後の転帰

群	1．予防活動群	2．対照群	非予防活動群（対照群含む）
n	18	14	46
認知症への転換例	0（0%）	3（21%）	12（26%）
正常化例	16（89%）	6（43%）	6（13%）

◎1,2群は5-CogとCDRによって評価
◎2群を除く非予防活動群はCDRのみで評価

現在（6年目の評価済み）、当初から追跡している予防活動群の住民は15人で（最近1人が死亡したが、認知症はなし）、すべて認知症を呈さず、MCIの住民は5人（aMCIが2人、multi-domain MCIが3人）となった。また、この時点での正常への復帰は10人で、リバーターは56%と減少した。

このように6年間で予防活動群18人中2人だけ（11%）が認知症に転換し、非予防活動群との間に認知症への転換率で明らかな相違が認められた。

以上のように長期にわたる安心院プロジェクトの認知症予防効果は明らかであった（表4）。

まとめと今後の予防活動の展望

すべての高齢者を対象にした認知症啓発活動と、それに引き続くMCI早期発見、認知症予防プロジェクトは安

表4　6年後の転帰

群	予防活動群	非予防活動群
n	18	46人中の40人
M：F	8：10	15：25
年　齢	73.7 ± 4.6	76.5 ± 8.2
教育年数	10.2 ± 1.9	10.1 ± 2.1
認知症への転換例	2（11%）	21（53%）
正常化例	10（56%）	?

◎非予防活動群はCDRによって評価
◎この表の年齢は予防活動開始時（6年前）の年齢を示す。?は、正確に評価できなかったことを意味する。非予防活動群40人のうち6人が死亡。そのうち5人が死亡前認知症を呈した。

心院町だけでなく、九州各地で実施されるべきだと考え、我々は現在、6地域（安心院以外に福岡市、北九州市2カ所、都城市、杵築市）で安心院方式による認知症予防活動を立ち上げ、指導している。

認知症への転換予防効果を示した安心院プロジェクトの教訓から、認知症予防の取り組みは①健常者や広い意味のMCI住民を対象とし、②参加者全員に認知症予防を目的とした活動で、町づくりにも貢献するものとしっかり認識させ、③ファシリテーターに見守られながら、④参加者間の社会的つながりを重視し、⑤週に一度、小集団で、自主的・創造的なレジャー活動で、各人の企画力を高めることを重視し、⑥大学によって定期的評価を受け、時に認知症予防に関する新知見を学びながら、⑦初期には専門家による支援があったとしても、徐々に自立していくプロジェクト――であるべきである。

プロジェクトの前提として地域住民教育、地域調査が不可欠であり、成功に向けては各種団体や多くの住民の協力、そのためにも十分な準備期間が必要であることも強調したい。

将来の認知症医療・福祉に関しては、早期発見から見守り、治療、介護など多面的に医療と福祉が強く連携した活動が展開されねばならない。

まずは①全国的に統一された診断・評価法による予防活動の結果判定などを検討していくこと、②高齢住民と健常な状態から予防活動を展開し、MCIやAD状態に移行した段階でスムーズに予防・見守り・介護・医療を展開可能にならしめるために地域高齢者全体を対象とした取り組みにすべく実行組織を確固たるものにする――必要がある。

北九州市八幡東区では地域の病院・介護施設が中心になってNPOを結成し、地域ぐるみの認知症予防プロジェクトが進行し、成果を上げている。こうした取り組みが、将来の小単位の地域で施設や医療機関を中心として認知症予防を町づくりと考えるグリッド・コミュニティー構想と一致した流れとなり、理想的な、世界の見本となる高齢社会を実現すると確信する。

文　献

1) 矢冨直美：認知症予防，総合リハビリテーション，34（11）：1047-53,2006.
2) 矢冨直美：ファイブ・コグ検査マニュアル，東京都老人総合研究所認知研究グループ，2006.
3) 杉村美佳・他：非薬物療法によるMild Cognitive Impairment（MCI）から認知症への進行予防効果に関する検討―安心院プロジェクト，老年精神医学雑誌，16（12）：1387-93,2005.
4) 杉村美佳・他：MCIの抽出に用いられる記憶検査と局所脳血流の関係―安心院プロジェクト，老年精神医学雑誌，18（10）：1113-22、2007.
5) Manly JJ et al:Frequency and course of mild cognitive impairment in a multiethnic community,Ann Neurol,63（4）：494-506,2008.

BJP BRITISH JOURNAL OF PHARMACOLOGY

BPS BRITISH PHARMACOLOGICAL SOCIETY

British Journal of Pharmacology (2009), 158, 1165–1172

0007-1188/09
www.brjpharmacol.org

RESEARCH PAPER

Reversal of temperature-induced conformational changes in the amyloid-beta peptide, Aβ40, by the β-sheet breaker peptides 16–23 and 17–24

Funda F. Bölükbaşı Hatip[1], Midori Suenaga[2], Tatsuo Yamada[3] and Yoichi Matsunaga[2]

[1]*Department of Pharmacology, Division of Internal Medicine, Faculty of Medicine, Pamukkale University, Kinikli Campus, Denizli, Turkey,* [2]*Department of Medical Pharmacology, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Tokushima Bunri University, Tokushima, Japan and* [3]*Fifth Department of Internal Medicine, School of Medicine, Fukuoka University, Fukuoka, Japan*

Background and purpose: Aggregates of the protein amyloid-beta (Aβ) play a crucial role in the pathogenesis of Alzheimer's disease (AD). Most therapeutic approaches to AD do not target Aβ, so determination of the factor(s) that facilitate aggregation and discovering agents that prevent aggregation have great potential therapeutic value.
Experimental approach: We investigated *ex vivo* the temperature-sensitive regions of Aβ1–40 (Aβ40) and their interactions with octapeptides derived from sequences within Aβ40 – β-sheet breaker peptides (βSBP) – using enzyme-linked immunosorbent assay, and dot blot and far-UV circular dichroism (CD) spectroscopy. We measured changes within the physiological limits of temperature, using antibodies targeting epitopes 1–7, 5–10, 9–14 and 17–21 within Aβ40.
Key results: Temperature-dependent conformational changes were observed in Aβ40 at epitopes 9–14 and 17–21 at 36–38 and 36–40°C respectively. The βSBPs 16–23 and 17–24, but not 15–22 and 18–25, could inhibit the changes. Moreover, βSBPs 16–23 and 17–24 increased digestion of Aβ40 by protease K, indicating a decreased aggregation of Aβ40, whereas βSBPs 15–22 and 18–25 did not increase this digestion. CD spectra revealed that β-sheet formation in Aβ40 at 38°C was reduced with βSBPs 16–23 and 17–24.
Conclusions and implications: The epitopes 9–14 and 17–21 are the temperature-sensitive regions within Aβ40. The βSBPs, Aβ16–23 and 17–24 reversed temperature-induced β-sheet formation, and decreased Aβ40 aggregation. The results suggest that the 17–23 epitope of Aβ40 is crucially involved in preventing Aβ40 aggregation and consequent deposition of Aβ40 in AD brain.
British Journal of Pharmacology (2009) **158,** 1165–1172; doi:10.1111/j.1476-5381.2009.00384.x; published online 28 September 2009

Keywords: amyloid β1–40; temperature; β-sheet formation; breaker peptides; Alzheimer's disease treatment

Abbreviations: Aβ, amyloid beta; AD, Alzheimer's disease; βSBP, beta-sheet breaker peptide; CD, circular dichroism; PK, protease K

Introduction

Alzheimer's disease (AD) is a neurodegenerative disorder characterized by cognitive impairment. The hallmark of AD pathogenesis in brain is amyloid plaques composed mainly of amyloid-beta (Aβ) protein aggregates (Katzman and Saitoh, 1991). It is believed that β-sheet formation is the general mechanism of aberrant protein aggregation leading to AD (Walsh *et al.*, 1999). Specific sequences within the main Aβ structure are involved in the structural transformation and the toxic effects of Aβ (Simmons *et al.*, 1994). The hydrophobic core around residues 17–20 of Aβ1–40 (Aβ40) (Lui *et al.*, 2004), and protein misfolding process in which intermolecular β-sheet interactions become stabilized abnormally (Huang *et al.*, 2000; McAllister *et al.*, 2005) are crucial for the formation of the β-sheet structure. Moreover, C-terminal fragments are more harmful than N-terminal fragments of Aβ, and may induce the development of dystrophic neurites by a toxic effect rather than by physical injury (Lin *et al.*, 2001; Kasa *et al.*, 2003). Recent reports suggested that soluble Aβ oligomers extracted directly from AD brain potentially impair synaptic structure and function, and that the Aβ N-terminus is the key sequence causing the cognitive impairment; however, insoluble Aβ did not impair the synaptic function (Cleary *et al.*, 2005; Shankar *et al.*, 2008).

Correspondence: Dr Yoichi Matsunaga, Department of Medical Pharmacology, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Tokushima Bunri University, Tokushima 770-8514, Japan. E-mail: yoichima@ph.bunri-u.ac.jp
Received 24 February 2009; revised 13 May 2009; accepted 14 May 2009

The structural form of Aβ is influenced by a variety of intrinsic, as well as extrinsic, factors that cause conformational transition of Aβ from a random-coil to the predominantly β-sheet structure. These factors include peptide concentration (Barrow *et al.*, 1992), low pH (Matsunaga *et al.*, 2002; Petkova *et al.*, 2004), metal ions (Drago *et al.*, 2007), high cholesterol (Kakio *et al.*, 2001; Yanagisawa and Matsuzaki, 2002) and pressure (Lin *et al.*, 2002). Moreover, temperature-dependent transition of Aβ40 plays an important role in the structural transformation from α-helix and random-coil to β-sheet form in aqueous solution by heating above 37°C (Gursky and Aleshkov, 2000) or at 45°C (Lin *et al.*, 2003).

The available drugs used in the treatment of AD mainly aim at increasing the cholinergic activity of the remaining healthy neurons, but do not act on the main cause of the disease. One of the therapeutic approaches was vaccination against the N- and C-terminals of Aβ. Passive immunization against the C-terminal increased brain-soluble Aβ42/43, decreased insoluble Aβ40 and Aβ42/43 and reduced plaque formation (Asami-Odaka *et al.*, 2005). However, the appearance of severe side effects during clinical trials has highlighted the need for improved safety and efficacy. In addition, low levels of anti-Aβ antibodies can be detected in individuals with or without AD, and their presence or levels are not correlated with the likelihood of developing dementia (Hyman *et al.*, 2001).

Accordingly, safer compounds preventing and reversing cerebral deposition of Aβ, and thus lowering the burden of insoluble Aβ have become an attractive therapeutic strategy for AD. It has been found that Aβ aggregation can be selectively inhibited with short synthetic peptides designed as β-sheet breaker peptides (βSBPs) (Synder *et al.*, 1994). *In vitro* cell culture and *in vivo* results suggest that βSBPs might be candidates for AD therapy directed towards reducing amyloid deposition (Permanne *et al.*, 2002a). Two pentapeptide βSBPs have been synthesized. One contains the same sequence as residues 16–20 (KLVFF) within Aβ (Tjernberg *et al.*, 1996), and the other is a five-residue synthetic peptide (iAβ5: LPFFD) homologous to the central hydrophobic fragment of Aβ 17–21 (LVFFA) with substitution of P for V, and D for A (Soto *et al.*, 1996). Both βSBP 16–20 and 17–21 could inhibit Aβ fibrillogenesis (Hetenyi *et al.*, 2002). Further, the βSBP 17–21 could prevent β-sheet formation, inhibit and disassemble amyloid fibrils *in vitro* and also prevent Aβ neurotoxicity in cell culture (Soto *et al.*, 1998) by stabilizing the normal conformation and destabilizing the β-sheet-rich structure (Soto *et al.*, 2000), reversing pre-existing Aβ fibrils (Sigurdsson *et al.*, 2000) or preventing formation of the amyloid plaques (Permanne *et al.*, 2002a). An end-protected version of iAβ5, acetylated at the N-terminus and amidated at the C-terminus (iAβ5p) with high rate of penetration across the blood–brain barrier had been synthesized. It has been reported that iAβ5 is able to induce a dramatic reduction in amyloid deposition and the associated brain inflammation, and increase neuronal survival (Permanne *et al.*, 2002b).

The present study aimed at detecting temperature-sensitive regions within Aβ40, and determining whether or not temperature-induced changes are inhibited or reversed by octapeptide βSBPs (corresponding to residues 15–22, 16–23, 17–24 and 18–25 in Aβ40) using enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA), Western dot blots and far-UV circular dichroism (CD) spectra analysis.

Methods

Temperature modification of Aβ peptides and ELISA assay

ELISA was conducted for both Aβ40 alone and its mixture with βSBPs. Samples of Aβ40 alone (10 μg·mL^{-1}) were incubated from 35 to 42°C with 1°C intervals, and also incubated at 20°C as a control for soluble Aβ40, for 30 min in tubes, then 50 μL of each solution was bound to the wells of the flat bottom high polystyrene microtitre plates overnight at the same temperature at which it had been incubated. In a similar way, Aβ40 (10 μg·mL^{-1}) was also incubated after mixing with 10 μg·mL^{-1} of each βSBP: Aβ15–22, 16–23, 17–21 and 18–25. After the removal of excess samples, the wells were first incubated for 2 h with Tris-buffered saline (TBS; 20 mM Tris/34 mM NaCl, pH 7.4) containing 3% bovine serum albumin (BSA) at 37°C. After discarding the solution, primary antibody (50 μL of 1 μg·mL^{-1} of either 4G8, 6F/3D, anti 5–10 or anti 1–7) in TBS containing 1% BSA was incubated for a further 2 h at 37°C, pH 7.4. After incubation, the wells were washed with TBS with 0.1% Tween-20, pH 7.4 (TBST), and incubated for an additional 1 h at 37°C with 50 μL of a 1:5000 dilution of alkaline phosphatase-conjugated secondary antibody. After washing with TBST, bound antibodies were detected by the addition of *p*-nitrophenyl phosphate, and the absorbance was measured after 30 min at 405 nm using a spectrophotometric plate reader (Microplate reader MPR A4I, Tosoh, Tokyo, Japan). All washing steps were performed six times. The same procedure was applied for Aβ40 and βSBP mixtures.

Dot blot

A preliminary investigation was conducted using βSBPs at 1, 5, 10, 15 and 20 μg·mL^{-1} concentrations, and showed that βSBP at 10–20 μg·mL^{-1} produced dark spots, indicating that high amounts of protein remain on the membrane and the spots were completely digested with protease K (PK) at 0.05 mg·mL^{-1}. Accordingly, we carried out dot blot studies on Aβ40 at 8 μg·mL^{-1} with or without βSBPs at 20 μg·mL^{-1}, which corresponds to a molar ratio of 1:12, Aβ40 : βSBP. Temperature-modified mixtures of Aβ40 and βBSP (200 μL) or Aβ40 alone at 20°C as a control for soluble Aβ40 were spotted and blotted onto methanol-immersed PVDF membrane (0.2 μm pore size; Invitrogen, Carlsbad, CA, USA) using the dot-blot apparatus (DP-48 Dot Plate; Advantec, Tokyo, Japan) by absorption with a vacuum pump. The membrane was then removed, rinsed in phosphate-buffered saline (PBS) and digested with PK.

PK digestion and dot blots

Each membrane was incubated without and with 10 mL of PK solution (0.05 mg·mL^{-1} in PBS, pH 7.4) for 1 h at 37°C with constant shaking. After removal of the PK solution, the reaction was terminated by washing with PBS with 0.1% Tween-20, pH 7.4 (PBST) three times at 15 min intervals. After blocking with 3% non-fat milk for 2 h, the membrane was

again washed with PBST and allowed to react with primary antibody 6E10 (1:10 000 dilution in PBS) for 2 h at room temperature, then the secondary antibody peroxidase-linked anti-mouse IgG (1:5000 dilution in PBS) was added and allowed to react for 1 h at room temperature. The membrane was washed three times with PBST, and the spots were detected with enhanced chemiluminescence (Immobilon, Western Chemiluminescent HRP substrate, Millipore Corp., Bedford, MA, USA) according to the manufacturer's instructions.

CD spectroscopy analysis

CD spectra were measured using a J-725 CD spectrometer (JASCO, Tokyo, Japan). For the far-UV CD spectra, 1 mm path length quartz cell (300 μL internal volume) was used, with bandwidth of 1 nm. Aβ40 was dissolved in 5 mM Tris-buffer (pH 9) at 1 mM, and diluted 20-fold by pure water to a final concentration of 50 μM (Bartolini *et al.*, 2007). The βSBPs of Aβ15–22, 16–23, 17–24 and 18–25 were dissolved in 0.4 M NaOH at 1 mM, and adjusted with HCl to pH 7 and diluted by pure water into the same final concentration (50 μM). The mixture of Aβ40 and βSBP at 1:1 mole ratio or Aβ40 alone was incubated at 38 and 20°C as a control of soluble Aβ40 for 30 min, and spectra were recorded, using 2 nm step and a 1 s averaging time and 100 nm min^{-1} scan speed.

Statistical analyses

For ELISA measurement, values are presented as mean ± SEM of six experiments, each in triplicate. Differences between 6F/3D antibody and other antibodies at each temperature were analysed using unpaired *t*-tests. Data of βSBPs are also presented as mean ± SEM of six experiments in triplicate, and the differences between each (βSBP and Aβ) mixture and Aβ40 alone were analysed using unpaired *t*-tests. The values of pixel densities from the dot blot studies at 38°C were expressed as mean ± SEM of six experiments, and statistical analysis was by analysis of variance.

Materials

Aβ peptides and βSBPs. Aβ40, DAEFRHDSGYEVHHQKLVFFAEDVGSNKGAIIGLMVGGVV were purchased from AnaSpec (San Jose, CA, USA) and dissolved in water as a stock solution, and diluted with PBS, pH 7.3, to the indicated concentrations, and used for ELISA and dot blot study. For CD study, PBS interferes with CD spectra, and we diluted the stock Aβ40 with pure water. The βSBPs: Aβ15–22, 16–23, 17–24 and 18–25 were purchased from Wako (Tokyo, Japan). All βSBPs were dissolved in a minimal amount of dimethylsulphoxide (DMSO) for ELISA and dot blot study, or dissolved in NaOH (0.4 M) for CD spectra analysis before dilution with water at the indicated concentrations.

Monoclonal and polyclonal antibodies. The monoclonal antibodies used were 4G8, epitope 17–21 (Signet Pathology Systems, Inc., Dedham, MA, USA); 6F/3D, epitope 9–14 (DAKO, Glostrup, Denmark); anti 5–10, epitope 5–10 (QCB, Camarillo, CA, USA); and 6E10, epitope 3–8 (COVANCE, Berkeley, CA, USA). The polyclonal anti 1–7 was from QCB. Alkaline phosphatase-conjugated goat anti-mouse IgG for monoclonal antibody and anti-rabbit IgG for polyclonal antibody (Promega, Madison, WI, USA) in ELISA, and peroxidase-labelled anti-mouse IgG (Amersham Life Science, Pharmacia Biotech, Uppsala, Sweden) for dot blots were used as secondary antibody respectively.

Chemicals

BSA and *p*-nitrophenyl phosphate (Sigma, St Louis, MO, USA), PK (Wako) were used. Other chemicals were from Sigma-Aldrich (Tokyo, Japan).

Results

Reactivity of antibodies against temperature-modified Aβ40

In order to determine whether the temperature was significant in the ELISA after immobilization of Aβ peptides, the OD was measured as a function of temperature at 36, 37, 40 and 42°C with primary antibody for 2 h and secondary antibody for 1 h. After immobilization, the samples were unaffected by the changes to 37°C, but it also showed a corresponding slight increase of OD by 0.03–0.04 in signal if it was incubated at 42°C (data not shown). We confirmed that the conformational changes induced by overnight incubation are preserved after immobilization in the plates.

The antibodies investigated in this study displayed a different reactivity against temperature-modified Aβ40 (Figure 1). No obvious differences were detected between control samples at 20 and 35°C. A significant difference was detected among the antibodies ($P < 0.001$). Moreover, the effect of each antibody was significantly different at various temperatures ($P < 0.05$). However, the antibodies–temperature interactions did not reach significance, suggesting that the effects of

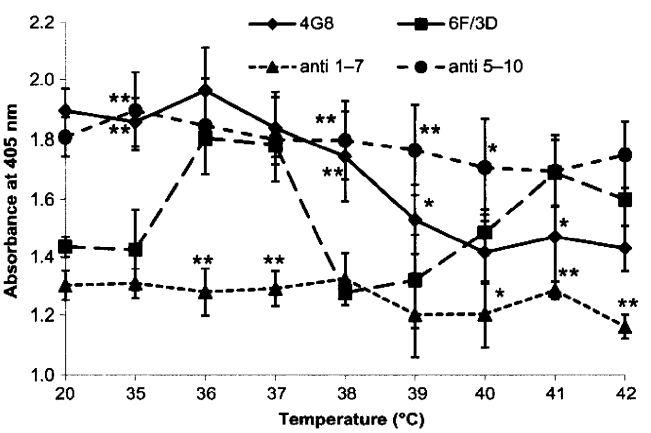


Figure 1 Enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA) measurements of antibody affinity towards temperature-modified Aβ40. The reactivities of four antibodies (4G8, 6F/3D, anti 1–7, anti 5–10) to samples of Aβ40 that had been exposed to temperatures over the range 36–42°C at 1°C interval and at 20°C as a control, were monitored by ELISA. Statistical comparisons were performed with unpaired *t*-tests. The values are means ± SEM. Statistically significant differences versus 6F/3D were determined at each temperature. $^{*}P < 0.05$, $^{**}P < 0.01$ ($n = 6$).

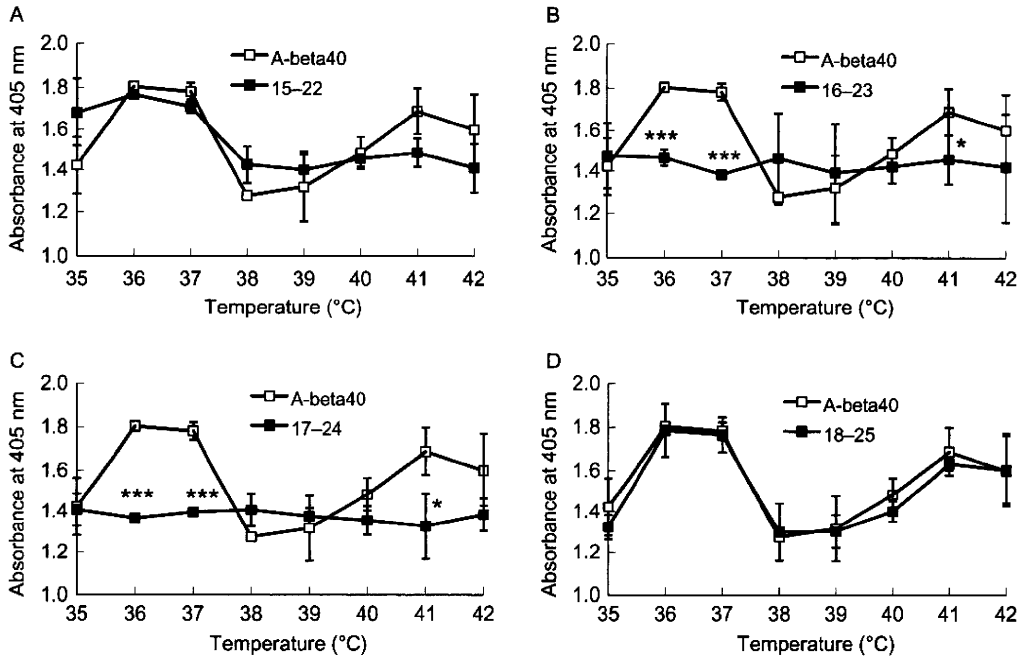


Figure 2 Changes of antibody affinity towards temperature-modified Aβ40 in the presence of β-sheet breaker peptides (βSBPs). The reactivity of 6F/3D was determined by enzyme-linked immunosorbent assay for temperature-modified Aβ40 without βSBP (□) and with relevant βSBP (■): 15–22 (A), 16–23 (B), 17–24(C) and 18–25(D). Statistical comparisons were made with unpaired *t*-tests. The values are means ± SEM. Statistically significant differences versus Aβ40 alone were determined at each temperature. $^*P < 0.05$, $^{***}P < 0.001$ ($n = 6$).

different antibodies were similarly affected by various temperatures. The anti 1–7 polyclonal antibody exhibited the lowest reactivity against temperature-modified Aβ40, and this reactivity was significantly different from the other antibodies. The monoclonal anti 5–10 antibody showed high levels of reactivity compared with antibodies 6F/3D (anti 9–14) and anti 1–7, but not from 4G8 (anti 17–21). For both anti 5–10 and 1–7 antibodies, the reactivity was constant through the whole temperature ranges (35–42°C), and no temperature-dependent difference was detected. The monoclonal antibody 6F/3D showed temperature-dependent reactivity, and the reactivity was bimodal; decreasing and increasing reactivity of 0.5 and 0.4 absorbance units, respectively, when the modified temperature was increased from 36 to 38°C, and from 38 to 41°C respectively. On the other hand, 4G8 showed temperature-dependent reactivity; apparent decreased reactivity of 0.6 absorbance units when the temperature was increased from 36 to 40°C. No significant difference was detected between 6F/3D and 4G8. Thus, the 9–14 and 17–21 amino acid residues within the Aβ40 peptide were sensitive to temperature changes.

Inhibition of temperature-modified conformational changes of Aβ40 by βSBP

The preliminary study indicated that Aβ1–16 did not change the reactivity of Aβ40,whereas a change was evident for Aβ17–42 (data not shown). According to the present results shown in Figure 1, we investigated the reactivity of 6F/3D antibody towards the mixture of temperature-modified Aβ40 with βSBP 15–22, 16–23, 17–24 or 18–25. We chose 6F/3D, which recognized 9–14 of Aβ40, to avoid direct interaction with the βSBPs, because 4G8 recognized 17–21 of Aβ40 which includes the sequences of the βSBPs. The reactivity of Aβ40 alone was regarded as control. The βSBP 15–22 (Figure 2A) and 18–25 (Figure 2D) did not change the reactivity of Aβ40; however, βSBP 16–23 (Figure 2B) and 17–24 (Figure 2C) could change the reactivity of Aβ40 in a constant manner. In the present study, the molar ratio of Aβ40 to the βSBPs was 1:5, and a lower ratio of βSBPs to Aβ40 was not effective; however, higher ratios showed almost the same effects as those with the 1:5 molar ratio (data not shown). We repeated these assays using βSBPs made up in 0.4 M NaOH and adjusted to pH 7, the same conditions as in the CD studies, and measured the changes of antibody affinity towards temperature-modified Aβ40. The signals from Aβ40 with the βSBPs prepared in DMSO were almost the same as those with the βSBPs prepared in NaOH, and the immunoreactivity patterns were similar to each other (data not shown).

Effect of βSBPs on temperature-induced conformational changes of Aβ40 in the presence and absence of PK

The amount of protein remaining on the membrane before and after PK digestion at three different temperatures 36, 38 and 42°C, and at 20°C as a soluble Aβ40 control is shown in Figure 3A as a representative result of six experiments. The soluble control showed remarkable differences before and after PK digestion. No significant effect was detected for temperatures within each βSBP group; however, the spot density was lower in the presence of βSBPs 16–23 and 17–24 after PK digestion than Aβ40 alone with PK, indicating the effects of these βSBPs were to increase Aβ40 sensitivity to PK digestion. Figure 3B shows the average pixel density of each spot at 38°C

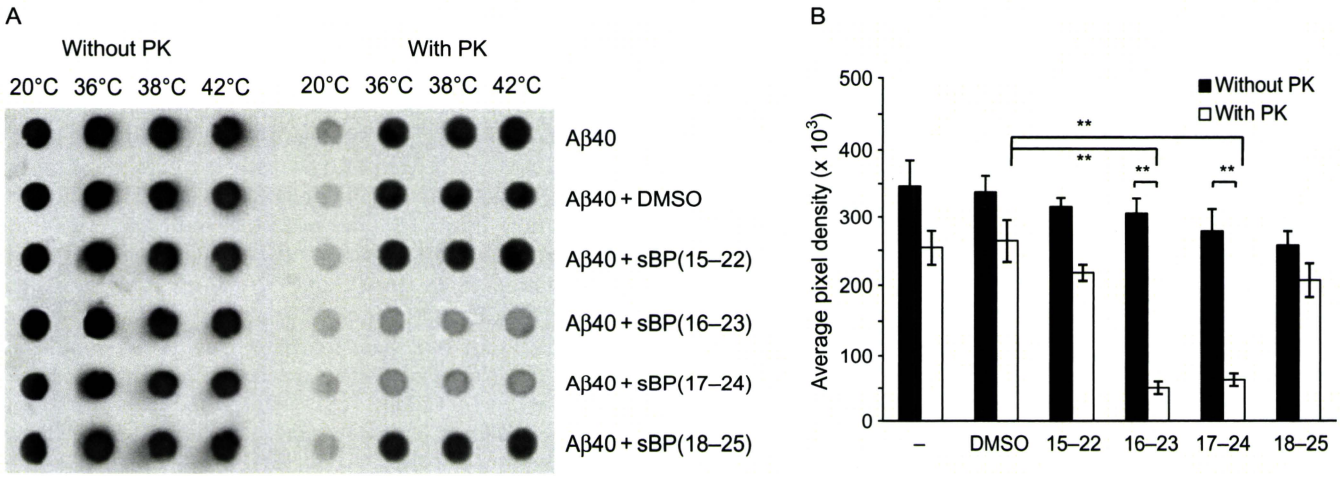


Figure 3 Determination of protease K (PK) sensitivity for temperature-modified Aβ40 in the presence of β-sheet breaker peptides (βSBPs) by dot blot. Effects of βSBPs 15–22, 16–23, 17–24 and 18–25 on PK-induced digestion of temperature-modified Aβ40 at 36, 38, 42°C and at 20°C as a control were determined by dot blot. (A) Each spot shows the remaining Aβ40 without or with PK, and the figure is a representative of six experiments. (B) The average pixel density of each spot at 38°C was measured by NIH image analysis after subtracting the mean background pixel density from that of the spots. Values are means ± SEM. Statistical analysis was performed with analysis of variance and significant differences. $^{**}P < 0.01$ ($n = 6$).

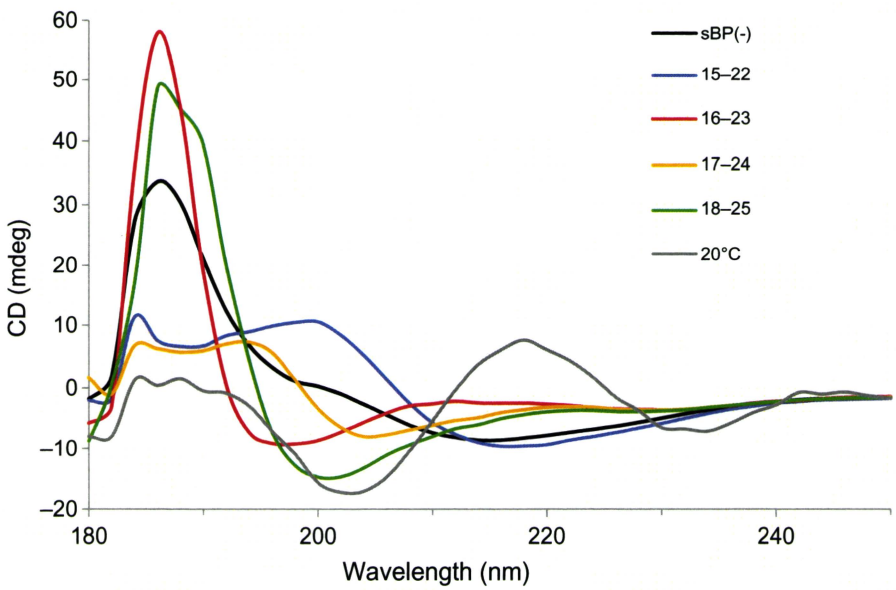


Figure 4 Circular dichroism (CD) spectra reveal the reduction of thermally induced β-sheet formation of Aβ40 at 38°C with β-sheet breaker peptide (βSBP). The secondary structure of thermally induced Aβ40 at 38°C, and at 20°C as a control in the presence or absence of βSBP was measured by far-UV CD spectra. Spectra for Aβ40 alone (sBP) as a control, and mixtures with βSBP 15–22, 16–23, 17–24 and 18–25 are shown.

in Figure 3A. In this study, the PK digestion showed a tendency to reduce Aβ40 spot density (30%), but this was not significant, and βSBPs 15–22 and 18–25 did not alter the spot density level either. On the other hand, the βSBPs 16–23 and 17–24 reduced the spot densities by around 80% after PK digestion, indicating greater digestion with PK of Aβ40 and higher PK sensitivity in the presence of the two βSBPs. The spots of Aβ40 with/without DMSO before and after PK digestion showed no differences, indicating DMSO at this concentration did not affect the results. These results are also comparable with the results of the ELISA. In the present study, we also tested various molar ratios of Aβ40 to the βSBPs at 1:1, 1:5, 1:10 and 1:20 for PK digestion, and observed no altered PK sensitivity below the molar ratio of 1:5.

CD spectra of Aβ40 with βSBPs

The CD experiments were carried out to confirm the effects of βSBPs to prevent temperature-induced conformational changes of Aβ40 at 38°C (Figure 4). The minimum CD spectrum of Aβ40 alone was at around 218 nm, which corresponds to a β-sheet-rich conformation. Although the minimum CD spectrum of Aβ40 with βSBP 15–22 was not shifted, the spectra of Aβ40 with βSBP 16–23, 17–24 and

18–25 were shifted to around 200 nm, which was close to the soluble control Aβ40 at 20°C. In addition, the CD amplitudes at 218 nm of Aβ40 with βSBP 16–23, 17–24 and 18–25 were increased more than the values for Aβ40 alone by 3.9–5.8 mdeg. These results indicate that all βSBPs except 15–22 could inhibit β-sheet formation of Aβ40 at 38°C.

Discussion

It is generally accepted that the conformational changes within the Aβ protein that result in aggregation of aberrant β-sheet-rich intermediates, are important in the development of AD. Determination of the sequences within Aβ that are involved in these changes, and inhibition of such changes by βSBPs have considerable potential for a novel therapeutic approach to AD.

The conformational changes are induced by thermodynamic stress (Sengupta *et al.*, 2003). However, various physiological factors including pH shift, co-precipitants of metal ions (Atwood *et al.*, 1998) and abnormal oxidative metabolites including cholesterol-derived aldehydes (Bieschke *et al.*, 2005) are also involved in the conformational changes of Aβ40 in brain.

High temperature (including fever) could induce structural changes in Aβ (tangles and plaques) or changes in brain similar to those observed in AD (Sinigaglia-Coimbra *et al.*, 2002). Our preliminary experiments revealed that when a wide range of temperatures (0–99°C) was applied, the conformation of Aβ40 at 0–20°C was (α-helical, whereas conformational changes of Aβ40 towards β-sheet configuration were observed at 35–45, 60–65 and 80–85°C. The occurrence of changes within specific temperature ranges may indicate thermal specificity or the adoption by Aβ40 of various conformations at wide range of heating, due to increasing intermolecular β-sheet structures (Chu and Lin, 2001).

We chose to work over 35–42°C, a temperature range that includes the physiological limits, and found that the apparent changes at 36–38°C involved the epitopes around amino acid residues 9–14, whereas the changes induced at 36–40°C involved those around residues 17–21. We infer from these results that the 6F/3D epitope (amino acid residues 9–14) in Aβ40 was inaccessible at 38°C, and again exposed at around 41°C; however, that of the 4G8 epitope was inaccessible over 38°C. Both sequences have been reported to be involved in pH-induced conformational transitions of Aβ42 (Matsunaga *et al.*, 2002). However, CD spectra study for thermally modified Aβ40 at 36–40°C lacks conformational changes (data not shown), indicating retention of the secondary structure and only a minor loosening of the tertiary structure, within this temperature range.

Various terminuses and segments of Aβ40 may display different biophysical properties and biological activities. The C-terminus of Aβ40 quiescent fibrils lacks β-sheet structure compared to the more rigid structure within the 24–30 segment (Williams *et al.*, 2006). It seems that the thermal changes take place in a part of Aβ40 involving the central hydrophobic region that is also implicated in various biological functions including interaction with other proteins (Golabek *et al.*, 1996). Moreover, the 9–21 sequence includes amino acid residues 10–23 that provide the structural basis of the hydrophobic behaviour under physiological conditions (Hilbich *et al.*, 1991).

It has been reported that the pentapeptides βSBP KLVFF (16–20) and LPFFD (17–21 analogous) interact with the main Aβ structure via hydrogen bridges with the βSBP binding in the plane of the amyloid dimer (Hetenyi *et al.*, 2002). The present results from ELISA and dot blot studies showed that temperature-induced conformational changes were reversed by octapeptide βSBPs 16–23 and 17–24, but not by βSBPs 15–22 and 18–25.

As the βSBPs are not water soluble, we could not avoid the use of DMSO, NaOH being the alternative for dissolving the βSBPs. The use of DMSO may alter Aβ40 conformation; however, a pH shift by NaOH may have a greater effect on Aβ40 behaviour (Matsunaga *et al.*, 2002). In the present study, we used minimal amount of DMSO to dissolve the βSBPs, and diluted with water to the final DMSO concentration of 0.2% (Figures 2 and 3), which did not affect the conformation of Aβ40 (Shen and Murphy, 1995; Kanaoka *et al.*, 2003), but this concentration is high enough to change the cell membranes and induce heat shock proteins in biological experiments.

However, as traces of DMSO disturb the CD spectra, we used 0.4 M NaOH instead of DMSO to dissolve the βSBPs and adjusted to pH 7. The effect of βSBP 18–25 revealed by CD study did not correspond to the results of ELISA and dot blot (Figure 4). We speculate that incubation of Aβ40 with pure water and a pH shift by NaOH to dissolve the βSBPs in the CD study may be responsible for the different results of βSBP 18–25 between ELISA, dot blot and CD studies.

The region 16–23 (KLVFFAED) used in this study contains KLVFF that has been reported to protect against Aβ toxicity (Pallitto *et al.*, 1999). Moreover, it has been proposed that the region 1–16 is not active by itself, but is required for the activity of Aβ40, whereas the region 29–42 is inactive in pH-induced conformational changes (Matsunaga *et al.*, 2004). From the results obtained in this study, we suggest that the amino acid residues 16–24 within Aβ40 is the region that is involved in reversal of temperature-dependent conformational changes by the βSBPs. However, our studies showed that the βSBPs 16–23 and 17–24 prevented the temperature-dependent conformational changes of Aβ40.

Our results also showed that βSBP 16–23 and 17–24 exposed Aβ40 to the activity of PK, as PK did not affect the already denatured Aβ40, but could digest it in the presence of βSBPs 16–23 and 17–24, but not the βSBPs 15–22 and 18–25. The ability of partial Aβ fragments around Aβ 16–23 to inhibit Aβ40 aggregation may be due to their ability to bind the central hydrophobic region of Aβ40 including the temperature-sensitive region, thereby destabilizing oligomers necessary for fibril stability. As a result, the site of protease cleavage would be exposed to the activity of PK. However, the βSBP 15–22 besides not inhibiting temperature-conformational changes, did not reduce PK digestion.

In conclusion, our results revealed that Aβ40 exhibited differential temperature-dependent conformational changes: the epitopes 9–14 involved in the conformational change induced at 36–38°C, whereas epitope 17–21 involved in those induced at 36–40°C. These changes could be reversed by the βSBPs 16–23 and 17–24. These βSBPs could be of value in the

treatment of AD, and *in vivo* studies are required to confirm the possible therapeutic value of the compounds.

Acknowledgements

This study was supported by Grant-in-Aid (no. 11670650, AD) from the Ministry of Education, Science, Sport and Culture of Japan, and grant P1-0140 to V.T. from the Ministry of Higher Education, Science and Technology of the Republic of Slovenia. The authors are grateful to Dr I. Hatip-Al-Khatib for help in preparing the manuscript.

References

Asami-Odaka A, Obayashi-Adachi Y, Matsumoto Y, Takahashi H, Fukumoto H, Horiguchi T *et al.* (2005). Passive immunization of the Aβ42(43) C-terminal-specific antibody BC05 in a mouse model of Alzheimer's disease. *Neurodegener Dis* **2**: 36–43.

Atwood CD, Moir RD, Hung X, Scarpa RC, Bacarra NM, Romano DM *et al.* (1998). Dramatic aggregation of Alzheimer abeta by Cu(II) is induced by conditions representing physiological acidosis. *J Biol Chem* **273**: 12817–12826.

Barrow CJ, Yasuda A, Kenny PT, Zagorski MG (1992). Solution conformations and aggregational properties of synthetic amyloid beta peptides of Alzheimer's disease: analysis of circular dichroism spectra. *J Mol Biol* **225**: 1075–1093.

Bartolini M, Bertucci C, Bolognesi BM, Cavalli A, Melchiorre C, Andrisano V (2007). Insight into the kinetic of amyloid β(1–42) peptide self-aggregation: elucidation of inhibitors' mechanism of action. *Chembiochem* **8**: 2152–2161.

Bieschke J, Zhang Q, Powers WT, Lerner RA, Kelly JW (2005). Oxidative metabolites accelerate Alzheimer's amyloidogenesis by two-step mechanism, eliminating the requirement for nucleation. *Biochemistry* **44**: 4977–4983.

Chu HL, Lin SY (2001). Temperature-induced conformational changes in amyloid beta(1–40) peptide investigated by simultaneous FT-IR microspectroscopy with thermal system. *Biophys Chem* **89**: 173–180.

Cleary JP, Walsh DM, Hofmeister JJ, Shankar GM, Kuskowski MA, Selkoe D *et al.* (2005). Natural oligomers of the amyloid-β protein specifically disrupt cognitive function. *Nat Neurosci* **8**: 79–84.

Drago D, Folin M, Baiguera S, Tognon G, Ricchelli F, Zatta P (2007). Comparative effects of Abeta(1–42)-Al complex from rat and human amyloid on rat endothelial cell cultures. *J Alzheimers Dis* **11**: 33–44.

Golabek AA, Soto C, Vogel T, Wisniewski T (1996). The interaction between apolipoprotein E and Alzheimer's amyloid β-peptide is dependent on β-peptide conformation. *J Biol Chem* **271**: 10602–10606.

Gursky O, Aleshkov S (2000). Temperature-dependent beta-sheet formation in beta-amyloid abeta(1–40) peptide in water: uncoupling beta-structure folding from aggregation. *Biochim Biophys Acta* **1476**: 93–102.

Hetenyi C, Kortvelyesi T, Penke B (2002). Mapping of possible binding sequences of two beta-sheet breaker peptides on beta amyloid peptide of Alzheimer's disease. *Bioorg Med Chem* **10**: 1587–1593.

Hilbich C, Kisters WB, Reed J, Masters CL, Beyreuther K (1991). Aggregation and secondary structure of amyloid βA4 protein of Alzheimer's disease. *J Mol Biol* **218**: 149–163.

Huang JTH, Yang DS, Plaskos NP, Go S, Yip CM, Fraser PE *et al.* (2000). Structural studies of soluble oligomers of the Alzheimer β-amyloid peptide. *J Mol Biol* **297**: 73–87.

Hyman BT, Smith C, Buldyrev I, Whelan C, Brown H, Tang MX *et al.* (2001). Autoantibodies to amyloid-beta and Alzheimer's disease. *Ann Neurol* **49**: 808–810.

Kakio A, Nishimoto SI, Yanagisawa K, Kozutsumi Y, Matsuzaki K (2001). Cholesterol-dependent formation of GM1 ganglioside-bound amyloid beta-protein, an endogenous seed for Alzheimer amyloid. *J Biol Chem* **276**: 24985–24990.

Kanaoka NH, Hasegawa K, Nakai H, Goto Y (2003). Dissolution of beta-2-microglobullin amyloid fibrils by dimethylsulfoxide. *J Biochem* **134**: 159–164.

Kasa P, Papp H, Zombori J, Mayer P, Checler F (2003). C-terminal fragments of amyloid-β peptide cause cholinergic axonal degeneration by a toxic effect rather than by physical injury in the nondemented human brain. *Neurochem Res* **28**: 493–498.

Katzman R, Saitoh T (1991). Advances in Alzheimer's disease. *FASEB J* **5**: 278–286.

Lin H, Bhatia R, Lal R (2001). Amyloid beta protein forms ion channels: implications for Alzheimer's disease pathophysiology. *FASEB J* **15**: 2433–2444.

Lin SY, Chu HL, Wie YS (2002). Pressure-induced transformation of alpha-helix to beta-sheet in the secondary structures of amyloid beta (1–40) peptide exacerbated by temperature. *J Biomol Struct Dyn* **9**: 619–625.

Lin SY, Chu HL, Wie YS (2003). Secondary conformations and temperature effect on structural transformation of amyloid beta(1–28), (1–40) and (1–42) peptides. *J Biomol Struct Dyn* **20**: 595–601.

Lui R, MaAllister C, Lyubchenko Y, Sierks MR (2004). Residues 17–20 and 30–35 of beta-amyloid play critical roles in aggregation. *J Neurosci Res* **75**: 162–171.

Matsunaga Y, Saito N, Fuji A, Yokotani J, Takakura T, Nishimura T *et al.* (2002). A pH-dependent conformational transition of Aβ peptide and physicochemical properties of the conformers in the glial cell. *Biochem J* **361**: 547–556.

Matsunaga Y, Fuji A, Awasthia A, Yokotanib J, Takakura T, Yamada T (2004). Eight-residue Aβ peptides inhibit the aggregation and enzymatic activity of Aβ42. *Regul Pept* **120**: 227–236.

McAllister C, Karymov MA, Kawano Y, Lushnikov AY, Mikheikin A, Uversky VN *et al.* (2005). Protein interactions and misfolding analyzed by AFM force spectroscopy. *J Mol Biol* **354**: 1028–1042.

Pallitto MM, Ghanta J, Heinzelman P, Kiessling LL, Murphy RM (1999). Recognition sequence design for peptidyl modulators of beta-amyloid aggregation and toxicity. *Biochemistry* **38**: 3570–3578.

Permanne B, Adessi C, Fraga S, Frossard MJ, Saborio GP, Soto C (2002a). Are β-sheet breaker peptides dissolving the therapeutic problem of Alzheimer's disease? *J Neural Transm* **62**: 293–301.

Permanne B, Adessi C, Saborio GP, Fraga S, Frossard MJ, Dorpe JV *et al.* (2002b). Reduction of amyloid load and cerebral damage in a transgenic mouse model of Alzheimer's disease by treatment with β-sheet breaker peptide. *FASEB J* **16**: 860–862.

Petkova AT, Buntkowsky G, Dyda F, Leapman RD, Yau WM, Tycko R (2004). Solid state NMR reveals a pH-dependent antiparallel beta-sheet registry in fibrils formed by a beta-amyloid peptide. *J Mol Biol* **335**: 247–260.

Sengupta P, Garai K, Sahoo B, Shi Y, Callaway DJ, Maiti S (2003). The amyloid beta peptide(abeta1–40) is thermodynamically soluble at physiological concentrations. *Biochemistry* **42**: 10506–10513.

Shankar GM, Li S, Mehta TH, Garcia A, Hepardson NE, Smith I *et al.* (2008). Amyloid-β protein dimers isolated directly from Alzheimer's brains impair synaptic plasticity and memory. *Nat Med* **14**: 837–842.

Shen CL, Murphy RM (1995). Solvent effects on self-assembly of β-amyloid peptide. *Biophys J* **69**: 640–651.

Sigurdsson EM, Permanne B, Soto C, Wisniewski T, Frangione B (2000). *In vivo* reversal of amyloid-β lesions in rat brain. *J Neuropathol Exp Neurol* **59**: 11–17.

Simmons LK, May PC, Tomaselli KJ, Rydel RE, Fuson KS, Brigham EF *et al.* (1994). Secondary structure of amyloid beta correlates with neurotoxic activity *in vitro*. *Mol Pharmacol* **45**: 373–379.

Sinigaglia-Coimbra R, Cavalheiro EA, Coimbra CG (2002). Postischemic hyperthermia induces Alzheimer-like pathology in the rat brain. *Acta Neuropathol* **103**: 444–452.

Soto C, Kidney MS, Baumann M, Frangione B (1996). Inhibition of Alzheimer's amyloidosis by peptides that prevent β-sheet conformation. *Biochem Biohys Res Commun* **226**: 672–680.

Soto C, Sigurdsson EM, Morelli L, Kumar RA, Castano EM, Frangione B (1998). β-Sheet breaker peptides inhibit fibrillogenesis in a rat brain model of amyloidosis: implications for Alzheimer's therapy. *Nat Med* **4**: 822–826.

Soto C, Saborio GP, Permanne B (2000). Inhibiting the conversion of soluble amyloid-β peptide into abnormally folded amyloidogenic intermediates: relevance for Alzheimer's disease therapy. *Acta Neurol Scand* **176**: 90–95.

Synder SW, Ladror US, Wade WS, Wang GT, Barrett LW, Matayoshi ED *et al.* (1994). Amyloid-β aggregation: selective inhibition of aggregation in mixtures of amyloid with different chain lenghts. *Biophys J* **67**: 1216–1228.

Tjernberg LO, Näslund J, Lindqvist F, Johansson J, Karlström AR, Thyberg J *et al.* (1996). Arrest of beta-amyloid fibril formation by a pentapeptide ligand. *J Biol Chem* **271**: 8545–8548.

Walsh DM, Hartley DM, Kusumoto Y, Fezoui Y, Condron MM, Lomakin A *et al.* (1999). Amyloid β-protein fibrillogenesis. *J Biol Chem* **274**: 25945–25952.

Williams AD, Shivaprasad S, Ronald WR (2006). Alanine scanning mutagenesis of Aβ(1–40) amyloid fibril stability. *J Mol Biol* **357**: 1283–1294.

Yanagisawa K, Matsuzaki K (2002). Cholesterol-dependent aggregation of amyloid beta-protein. *Ann N Y Acad Sci* **977**: 384–986.